

WE, JOKERS

英語のジョークを楽しむ会会報

No.42 April 10, 2014

- ジョークの心得三か条: 1. ジョークは心のゆとりであり、人生の潤滑油です。
2. ジョークで言語の壁に挑むのは知的快感です。
3. ジョークは簡潔が至上です。

第42回研究発表会

ジョークの中の X-ism (2) — Spoonerism と Wellerism —

豊田 一男



I. Spoonerism :

「頭韻転換」のことで、「同一文中の 2 語以上の語頭音（まれに他の部分の音）が入れ替わってしまう現象」を言います。ここでは、特にその結果、ユーモラスな効果を与えるもの、の意味で使います。例えば：

- May I *show* you to another *seat*?

(別の席に案内しましょうか) と言うべきところを、

May I *sew* you to another *sheet*?

(別のシーツにあなたを縫いつけましょうか)

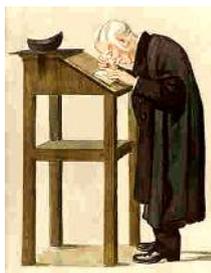
- Give me a well-*oiled* bicycle.

(十分油を差した自転車をくれ) と言うべきところを、

Give me a well-*boiled* icicle.

(十分沸騰したつららをくれ) のようになってしまう現象です。

Spoonerism という語は、William Archibald Spooner (1844-1930) という Oxford 大学 New College 学(寮)長をしていた人に由来します。



1879 年 New College のチャペルで、
“*Conquering kings their title take*”

(征服者の王たちがその称号を取る) と言うべきところを、“*Kinkering kongs...*”と意味をなさない発言をしたことで評判になり、その後多くの Spoonerism が生まれたと言われています。(郡司 1984)

次の例は Spooner が実際に言ったことになっていますが、真偽のほどは確かではないようです。ヴィクトリア女王について、

- Let us drink to our *dear old queen*.

(われらが敬愛する女王に乾杯) と言うべきところを、

Let us drink to our *queer old Dean*.

(われらが奇妙な老学寮長に乾杯) と言ってしまったとか、

- You have deliberately *wasted* two terms and you can leave Oxford by the *down train*.

(君は故意に 2 学期間を無駄にした、だから下り列車で Oxford を去りたまえ) と言うべきところを、

You have *tasted* two *worms* and you

can leave Oxford by *town drain*.

(君は故意に 2 匹の虫の味をみた、だから町の排水溝を通して Oxford を去りたまえ)と言ったと伝えられています。

Spoonerism は次 3 つのタイプがあります。

- (1) 語頭音の転換
- (2) 音節・語の一部の転換 (まれ)
- (3) 語全体の転換

(1) 語頭音の転換

• Before marriage a woman expects a man. After marriage she suspects him. After he dies he respects him.

(結婚前、女は男に期待する。結婚後は男を怪しいと思い、男が死ぬと尊敬する)

Expect, suspect, respect のシャレになっています。

• Career woman: a female more interested in plots and plans than pots and pans.

(キャリアウーマン: 鍋釜よりも構想や計画のほうに興味を持っている女性。)

plots ⇔ **pots, plans** ⇔ **pans** のシャレになっています。

(2) 音節の転換

• What's the difference between a photocopying machine and a flu epidemic?

One makes facsimiles; the other makes sick families.

(「コピー機と流感の流行の違いはなにか」「一方はファクシミリを作り、もう一方は病気の家族を作る」)

facsimiles ⇔ **sick families** と音節の入れ替えのシャレになっています。

• A drunk is someone who goes into a bar optimistically and leaves misty optically.

(酔っ払いとは楽天的にバーに入り、視覚がぼ

んやりして出ていく人だ)

optimistically (楽天的に) ⇔ **misty** (ぼんやりした)+**optically** (視覚的に)のシャレになっています。

(3) 語全体の転換

• What is the difference between a train conductor and a teacher?

One minds the train, the other trains the mind.

(「車掌と教師の違いは何か」「一方は電車に気を配り、一方は精神を鍛える。)

Mind: 「精神」⇔「気を配る」、**train**: 「列車」⇔「鍛える」のシャレです。

• It's better to find a hair in your soup than soup in your hair.

(髪にスープがついているよりもスープに髪が 1 本入っているほうがまだましだ。)

Hair と **soup** の位置転換のシャレになっています。

II. Wellerism:

「ことわざ・名句・名言の類を不適切な人物が不適切な場面で引用し、そこにしばしば駄じやれを絡ませて、ユーモラスな効果を生む表現」を言います。

Wellerism はイギリスの小説家 Charles Dickens (1812-70) の *The Pickwick Papers* (正式名: *The Posthumous Papers of the Pickwick Club*)(1836-7)に登場するこのクラブの会長であり主人公でもある Pickwick 氏の忠僕 Sam Weller から来ています。

機知とユーモアに富む男で、Dickens が創造した性格中最も優れた人物(齋藤(1985))とされています。



次の2つは作中 Weller が発した言葉です。

・“**Anything for a quiet life,**” as the man said when he took the situation at the light house.

(「静かな生活のためなら何でもいい」と、灯台に職を見つけた男が言った。)

・“**Business first, pleasure afterwards,**” as King Richard said when he stabbed the other king in the Tower before he smothered the babies.

(「仕事は先、楽しみは後だ」と、ロンドン塔で他の王を刺殺しその幼児たちを扼殺するのを後回しにしたとき。(郡司 1984))

King Richard は Richard 三世 (1452-85)

のことで、「せむしの王」と呼ばれ、野心・権謀・残忍のかたまりと言われた王のことです。



Wellerism には次の3要素を含みますが、すべてが揃っているわけではありません。

(i) 意見・説明などの言葉(ことわざ・引用・叫びなど) (ii) その語り手 (iii) 語り手の言葉の場違いな場面

(1) (i)(ii)(iii) を含むもの

・“**Overcome evil with good,**” as the preacher said when he knocked a rascal down with the Bible.

(「善をもって悪を打ち負かせ」と説教師はならず者を聖書で殴り倒しながら言った)

・“**Let there be light,**” murmured the raven-haired beauty, as she drew forth the peroxide bottle.

(「光よあれ」と緑の黒髪の美人が過酸化水素水を取り出しながらつぶやいた)

peroxide (過酸化水素水) は髪のパラオキシド用。

light: 「光」 ⇔ 「明るい」のシャレになっています。日本人もせっかくの黒髪を染めたがりません。

・“**There’s no accounting for tastes,**” as the woman remarked when told that her son was wanted by the police.

(「人の好みは説明できないわね」と息子が警察に指名手配されていると告げられて言った) 「あんな息子に何の用があるの? 物好きね」ということです。

(2) (iii)のないもの

・“**I was taken by a morsel,**” says the fish.

(「一口で捕まっちゃった」と魚が言った)

Morsel : 「ひとかじり」 ⇔ 「ごちそう」のシャレになっています。

・Said the sieve to the needle, “You’ve a hole in the head.

(ふるいが針に言った。「おまえの頭には穴が開いているぞ」)

ふるいは穴だらけの笥で、針は「おまえに言われたくない」と言いそうです。

・The ant said to the elephant, “Let’s be sports and not step on each other.”

(アリが象に向かって「スポーツマンらしくお互いを踏みつけるのはやめよう」と言った)

Sport は「スポーツマンらしい人; 潔く負けを認める人」の意味です。

〈参考書目〉

- 郡司利男(1984)『ことば遊び 12 講』(大修館)
 齋藤勇(監修)(1985)『英米文学辞典』(研究社)
 Esar, Evan (1978), *The Comic Encyclopedia* (Doubleday)
 Losten, Leo (1994), *Leo Losten’s Carnival of Wit* (A Plume Book)
 Mieder, Wolfgang, Kingsbury, Stewart A., (1994), *Dictionary of Wellerism* (Oxford University Press)
 Price, Steven D. (2006), *1001 Funniest Things Ever Said* (Lyons Press)

第 21 回ジョーク・コンテスト MC の記

棚橋 征一

今回の JLC には 27 点もの出題がありましたが、参加者数は年度末のせいか、15 名と若干少な目でした。MC の大事な仕事は時間の管理、と事前にアドバイスを頂いていたので、自己紹介もせぬまま、1st round で各作品の紹介をし、次いで 2nd round で活発な討議、投票をお願いしました。

1 位には初めから高得票であった深澤さん (12 票) が、2 位には同点 (9 票) で 3 名のかた (今井、村井、植田各氏) が選ばれました。また、大波賞には「 $2+6=8$ 」となった佐川さんの作品 (食欲に関する women's logic) が選ばれました。

優勝作品は、洋の東西を問わず勘定書きを敬遠したい人間の心理をついたもので、私も初見で「これは巧い!」と感心した次第です。個人的には、結婚後のかかあ天下を扱った 12 番 (草野さん)、値札を見て God を発する消費者を扱った 20 番 (佐川さん) の作品など、高得点を得るものと予想していたのですが、意外な結果に終わりました。

記憶が不確かなのですが、優勝作品は深澤さんが、ご自分で create されたようにお聞きしました。そうだとしたら、本当にうらやましい才能です。実は第 18 回のコンテストで MC を務めた村井久美子会員には、永年、川柳づくりを趣味のひとつにしておられる叔父上がおり、何度も川柳コンテストで入選を果たしておられます。毎回ウィットに富んだすばらしい作品で、自分にもこうしたユーモアのセンスと心の余裕

があったらなあ、と感嘆しきりです。

英語のジョークについてはほろ苦い思い出があります。20 代の頃、NY 市に在った米国子会社へ OJT 派遣させてもらう機会がありました。

夏休みに、ゴルフ好きの先輩ご夫婦に誘われて、NY 州北部にある Catskill という避暑地へ出かけました。ユダヤ系の人が大勢行くので、“Jewish Alps” とも呼ばれるところです。

昼間、ゴルフを楽しんだ後、シャワーを浴びて盛装し、ホテルの広いホールへ行くと、既に大勢の宿泊客が着席しており、ディナー・ショーを待っていました。ひとしきり音楽演奏があった後、ステージに男性のコメディアンが出てきて、漫談を始めました。

彼がジョークを飛ばす度に、会場全体がどっと笑いの渦に包まれます。私達にも時々笑点を理解できるのですが、判らないことが殆どで、つくり笑いをしている自分が嫌になりました。

話されている英語のスピードが速いこともあるでしょうが、やはり、他の人々が共有している Current Topics とか、有名人のコメントとか、文化的な要素等を十分に習得していないから理解できないんだろうな、と強く感じました。

これからも JLC の例会に参加させて頂き、宮本先生はじめ、他の皆さんのように、どんなジョークが出てきても、すぐに笑点を理解できるだけのユーモアのセンスを身につけたいと願う次第です。



ジョークと私

虚実皮膜の間

佐川 光徳

第13回ジョーク・コンテスト(2012年10月)に次のような出品がありました。当時開催中だったロンドン・オリンピックにからめてのものです。

Though the Olympics take place during Ramadan, some Muslim athletes said they wouldn't fast during games, for in Rome you do as the Romans do. Then, after sampling the British food, they said fasting proved to be a good idea.

【笑いのツボ】はもちろん後半部にあるのですが、前半部について、ひとりの参加者から異論が出されました。「ラマダンとは言っても、日没後の飲食は許される。全期間を通して断食しているわけではないのだから、競技の結果には影響しないはずだ」という趣旨のものです。

まず、断食が、日没とともに解禁になるという事実を知らなかった我が身の無知を恥じ、続いて、その昔バングラデシュのリバー・クルーズで、同行してくれた現地の若い女性が、飲食を絶って船室でぐったりしていた場面を思い浮かべ、「そうは言ったって、あれはなかなかつらいものではないだろうか」と思いました。

もしこれがローマ・オリンピック(1960年)開催時に出品されていたら、前半部の笑いは一段と増幅されたでしょうが、残念ながら後半部のジョークは成り立たなくなります。

これをきっかけに、ジョークがジョークとして受容される条件は何か、という問題を考え始めました。

ここに挙げるのは、オランダの版画家エッシャー(1898-1972)の有名なだまし絵「水車」(部分)です。板根巖夫『美の座標』(みすず書房、

1973)では、「無限に循環する水流が水車を回し“永久運動”をしたり...」と解説した後で、「さて、あなたはこの絵のどこがまちがっていると思いますか」と結んでいます。



目をこらしてご覧いただくと、循環する水流が、左側の塔から滝となって落下し、その下の奥に見える水車を回しています。水車の左手にある小屋の中には粉ひき装置が収納されているのでしょうか。

“永久運動”は、物理学の「エネルギー保存の法則」によって否定されている現象ですから、滝となって落下した水流が、ジグザク水路をたどって、いつの間にか、また滝の上流に達するのは不可解なことです。さればこそ板根さんは、「どこがまちがっていると思いますか」と問いかけているのです。

「まちがっている」という箇所を、JLCの会員なら、「この絵の【笑いのツボ】はどこにあるのでしょうか」と受け取ることでしょう。

しかし、この絵には、地球を照らす太陽が描かれていません。滝と水車をダムと発電機、ジグザクの水路を、太陽熱による地表からの水分蒸発と、降雨による位置エネルギーの獲得、と解釈するなら、ここに描かれている「永久運動」は、十分に成り立ちえる現象だという主張もできそうです。

しかし、こうした詮索を介入させれば、「だまされて、笑って受け入れる」という本会の設立趣旨に背きそうです。

結びには、フランスの哲学者アラン(1868-1951)の『幸福論』(神谷幹夫訳、岩波文庫)から。

しあわせだから笑っているのではない。

むしろぼくは、笑うからしあわせなのだ。

JLC 第43回研究発表会のご案内

会員各位のご参加をお待ちします。まだ会員になっておられない方もどうぞ。

- 日時：2014年5月17日(土)
14:00~16:00
- 会場：日本近代文学館(2階会議室)
(東京都目黒区駒場4-3-55、駒場公園内)
電話：03-3468-4181
- 交通：京王井の頭線「駒場東大前」駅(渋谷駅から二つ目)徒歩7分。地図は、「日本近代文学館」のHPをご検索ください。本館は目黒区の施設である広大な「駒場公園」の中にあり、道に迷うこともあるかも知れません。その場合は、ご遠慮なくお電話をしてお訊ねください。
- プログラム(総合司会=安藤雅彦 会員)
 - ① 英語のジョーク宅配便200号達成記念トークショー「笑う世間に鬼はなし」
執筆担当=相原悦夫・岡田茂富・田村公雄・土屋政雄・豊田一男の各会員、編集担当=佐川光徳 会員(MC)
 - ② 第22回ジョーク・コンテスト
MC=舟崎正敏 会員
- 参加費：会員・非会員とも1,000円
連絡先：jlcweb-renraku@eigojoker.com

第22回ジョーク・コンテスト出品募集

1. 語数は、30 WORDS を上限とします。これを上回る場合には、エントリーをお断りします。(ピリオド・コンマ・引用符・?・!などは、カウントの対象としません。)

なお、語数制限変更の趣旨を生かし、なるべく20語以上のものをお寄せください。

2. 出品数はお一人二題までとします。二題出品の際には、第一応募、第二応募の別を明記してください。第一応募のものはエントリーします

が、第二応募のものはMCの判断によって、エントリーしないこともあります。これは全体のエントリー数を20題程度に調整し、時間内に楽しい討論を十分できるようにするためです。

3. 必要と思われる場合には、注釈・イラスト・写真などを添えてくださってもかまいません。

4. コンテストは、2014年5月17日(土)の研究発表会で行われます。

5. 結果は、We, Jokers No.43, Joke Contest Supplement 紙上でも発表されます。

6. 当日出席しない方も応募できますが、つとめて出席されるようお願いいたします。

●宛先：jlcweb-renraku@eigojoker.com

●締め切り: 2014年5月7日(水・連休明け)

PALINDROMES

God! a dog!

Ooh, a yahoo!

Draw, O coward!

Niagara, O roar again!

Nurse, I spy gypsies, run!

Sad? I'm Midas. ⇒

Dennis and Edna sinned.

Live not on evil.

Snug & raw was I ere I saw war & guns.

(Tony Augade: *The Oxford Guide to Word Games* (1984))



WE, JOKERS No.42

英語のジョークを楽しむ会 (Joke-Loving Club) 会報

発行日：2014年4月10日

発行人：世話人代表 宮本倫好

編集人：佐川光徳

問合せ先：jlcweb-renraku@eigojoker.com